

あうる

O W L

Treasure every meeting as it's chance
to happen is only once in a life time.

北海道歴史秘話 32

札幌を東西に分ける「創成川」。 大友亀太郎が指揮したその前身 「大友堀」の開削は、人々に 「二万両の大工事」と呼ばれた。

小田原時代

大友亀太郎は、天保五（一八三四）年四月二十七日、相模国足柄下郡（現在の神奈川県小田原市）の農家・飯倉吉右衛門の長男として生まれた。

幼い頃から学問を好み、貧農だったため思うような勉強ができないなか、若くして読み書き・算盤を習得した。同郷の士に同じく貧農から身を起こし、天下に報徳の道を説いた二宮尊徳（金次郎）がおり、亀太郎は日頃から尊徳を敬慕していた。

二〇歳のとき亀太郎は村の会計係となったが、経理事務だけでなく行政実務や土木事業まで引き受け、懸命に働いた。ひつ迫する村の財政（貧しい農民の暮らし。これらを見て、我が身の生涯を一村だけで終わらせるのではなく、広く社会のために使いたいという気高い志が醸成されていった。

その志を実現させるべく、安政二（一八五五）年からの三年間、二宮尊徳の門下生となり、多くのものを身につけた。己の土木技術を向上させるため、水路の開削や道路の開墾・整備等々の工事に骨身を惜しまず従事する亀太郎の姿勢は、尊徳はもとより周囲の人々の称賛的となった。この時に得た技術が蝦夷地開拓に発揮されることとなる。

幕臣として蝦夷地開拓に

亀太郎二五歳のとき、その能力が幕府の目に留まり幕臣として召し抱えられた。これを機に苗字を大友と改め、亀太郎は安政五（一八五八）年十二月に箱館奉行付とな



大友亀太郎（『明治大正期の北海道（写真編）』より転載）

り、蝦夷地に渡った。

蝦夷地での初仕事は木古内の開墾。自ら土を掘り、モッコを担ぎ、この仕事を見事完成させた。箱館奉行は亀太郎の実力を認め、続いて大野平野を開拓しよう命じた。ここは狐や狼が棲む大変な荒地地で、亀太郎はかなり苦労したという。しかし、彼は挫折することなく、師である二宮尊徳譲りの報徳精神を発揮して作業員たちにはたわりの心を持って接し、自ら率先して開墾を進め、短期間でこの仕事を成し遂げた。

この木古内・大野の実績が箱館奉行はじめ幕府上層部の信頼を高め、亀太郎は「蝦夷地開拓掛」「石狩場所農夫取立繰込方」に任命され、石狩地区の本格的開拓を手掛け

ることとなる。

大友堀

慶応二（一八六六）年四月、亀太郎は治水・土木工事に深い知識を持つ一〇人とともに石狩の野に足を踏み入れた。一行は既に入植していた篠路開拓の祖・早山清太郎に道案内を頼み、開拓に適した土地を求めて石狩河口から南へと進んだ。野獣の声に怯えながらの野宿を重ね、伏古川の川べりを遡り、ようやく開拓地として相応しい農耕地を見つけた。そこが「三元村」となる。

五月中旬、亀太郎はまず用水路の開削に着手する。豊平川の支流を水源とし、現在の南三条橋辺りから一直線に北六条まで通し、そこから北東に折れ、北一三条東一六丁目の大友公園のところで伏古川に繋がると、およそ四キロの水路である。

人跡未踏の原始林の中、木を伐り、草を刈り、道を開削するところから始めなければならなかった作業員たちの苦労は、想像

もし明治維新が無かったら、札幌の中心は亀太郎が開拓した東区元町になっていたかもしれない。



明治4年の大友堀（「一ノ村新堀川（大友堀）/田本研造（函館）」、北海道大学附属図書館所蔵）

を絶するものであった。そして完成したのが九月九日。まさに突貫工事、驚くべき速度であった。

その秘密は作業員への手当にあった。決まった賃金のほか、働きに応じ能率給を支給したのだ。働き手の中には一日三両以上になった者もいたという。当時としては破格の賃金であり、人々はこの工事を「一両の大工事」と呼んだ。

こうして完成した人工運河が「大友堀」である。今の札幌村郷土記念館の場所に役宅を設け、辺りに大友堀の船着き場と物資保管用の倉庫を建設。人々はこの役宅を大友役所と呼んだ。

移民計画の頓挫

次のステップが開拓移民集めである。

亀太郎は、箱館奉行所の直営農場（御手作場）を造成し、毎年一〇戸の入植をめどとした移民計画を立てた。その内容は、農

民の保護と生産性向上のため、入植後三年間は老若男女を問わず、一日一人当たり米五合と味噌などを支給し、さらに家屋を与え、向こう一三年間、税を免除するというものであった。これも「農民が豊かにならねば、藩も富まず」という師・尊徳の教えであった。

しかし、この頃から徳川幕府の威光が徐々に薄れ、蝦夷地開拓の意欲も失せてしまったため、亀太郎の計画実施が難しくなった。結局五合扶持は二年足らずで終わり、家屋もついに与えることができなかった。

その後明治の世となり、明治二（一八六九）年、亀太郎は土地の開拓を開拓使へと引き継ぎ、翌年小田原に帰郷。その後、神奈川県議会議員となり、明治三十（一八九七）年十二月十四日、六四歳でその生涯を閉じた。



大正7年頃の創成川と帝国製麻株式会社札幌支店（北海道大学附属図書館所蔵）

あつろの杜

北海道出版企画センター代表取締役

野澤緯三男さん

Interview

今回お話ししてくれるのは北海道出版企画センターの野澤緯三男さん。松浦武四郎の翻刻本や単行本、松浦武四郎研究会の会誌など、出版界で長い間武四郎と関わってきました。

前身は明治三十一年創業の野澤活版所

北海道出版企画センターは、父が昭和四十六年に始めた会社です。元々うちは明治時代から札幌にあった野澤活版所という印刷会社だったのですが、父には出版をやりたいという志がありました。東京の出版社に勤めていましたが、昭和十六年に帰省した際、北大の河野広道先生に原稿依頼をしました。その後、戦争疎開のため退職して札幌に戻って来ましたが、先生に書いていただいた原稿は戦時中だったのでなかなか出版できず、お断りの手紙を書くはめになった。そんな経緯があったので、父は出版のスタートに先生の著作集を出したいと思っていました。

設立したとき既に先生が亡くなって八年ほどたっていました。出版の許可をご遺族の河野本道先生にお願いしたところ、広道先生の友人であった高倉新一郎先生に編集委員会の代表になっていただ

武四郎の思いを 活字で残し 人物を伝える



北海道の出版活動を集めた『北海道の出版文化史』



野澤緯三男
のざわ いみお

東京で家電関係の会社に勤めていたが、1975年に父に手伝わないかと言われ、Uターンし創業間もない北海道出版企画センターへ。以来、北海道に関する歴史・アイヌ・人物・自然等の書籍を出版している。松浦武四郎関係の出版も多く、センター内に松浦武四郎研究会があり会誌の発行を行う。1991年地方出版文化功労賞次席受賞、翌年地方出版文化功労賞を受賞。2006年には粹出版文化賞を受賞している。

こうということでも話がまとまり、著作集『北方文化論』四巻を刊行することができました。うちの出版物の骨子が歴史関係のものになっているのは、出発が河野広道先生の本だったからだと思います。

武四郎本は昭和五十三年から

松浦武四郎の出版物関係ですが、最初にいただいた原稿が高倉先生

からで、安政三年の『竹四郎廻浦日記』でした。これが出発点で、昭和五十三年の出版です。

仕上げの段階で、入力を担当した印刷所の人が「涙の最終稿」と打ってきた。それほど大変だったんでしょう。解読してあるといっても、文章も文字も難しく、読んでも判断が出来かねる。本当に一生懸命やってくれたんだと思う。それで涙の最終稿ですよ。僕はこれが未だに忘れられません。

高倉先生のととは秋葉貴さんですね。秋葉さんには安政四年の『丁巳日誌』、安政五年の『戊午日誌』の出版を許していただいた。そのあとも次々と出せたのは、「秋葉さ

んがやるのであれば」と、武四郎の子孫で史料所蔵者の松浦一雄さんのご理解があったからなんです。

武四郎の魅力

アイヌの人たちに対する武四郎の接し方には、当時蝦夷地を調査した人たちとは雲泥の差があります。『東西蝦夷山川地理取調図』という一番大きな地図がありますが、その最初の巻に二八三名のアイヌの人たちの名前を載せています。きちつと地域を分けて、この地域はこの人たちの案内ですよ。という形で残しているんですよ。「この人たちがいなければ地図はできませんでした」と言いたかったと思います。樺太の地図にも案内してくれた五二名の人が載っています。

幕末にこのような人物は他にいません。武四郎の場合は案内したアイヌの人びとと寝食を共にして調査していますのでね。蝦夷地を探索した他の人たちと武四郎との違いはそこにあります。

叶わなかった思い

武四郎には場所請負制を廃止し、アイヌの人たちを救済してほしいという思いがあったんですね。一度開拓使から廃止のお達しが出されます。

しかし、松前藩は無くなったは

ずなのに新たに設けられた開拓使という役所が、薩摩を中心とする役人と、それを取りまく商人たちに不当に運営され、廃止されたはずの場所請負制は漁場持という形で復活します。

武四郎は怒りを新たにし、明治三年三月に辞表を出して開拓判官を辞めます。表向き理由は病気のためとなっていますが、それは辞職願いというより施政を弾劾する長文のものです。

武四郎は十三年前の安政五年十一月に蝦夷地を去って以後、一度も北海道に来ることはありませんでした。

感謝

高倉先生や秋葉さんの出版が無ければ、まだまだ武四郎のことは知られていなかったでしょう。

秋葉さんや高倉先生がやった史料の翻刻や野帳を活字にする仕事は本当に目立たない仕事です。論文を書いたほうがよほど評価されるのに、秋葉さんなどはその仕事を何十年にもわたって行なってくれました。あとは印刷所・製本所さんの協力。決してうちがあつたことではありません。うちが原稿をもらって世に出すことができているのはそういう方々のおかげだと、感謝しています。

「あなたは大丈夫？」

正しいと思って読んでいた漢字の読みが間違っていたり、言い間違っていたり、という経験が誰しもあるのではないのでしょうか？

私も、「行脚」を「ぎょうぎやく」と読んで、「未公認の記録」を「ミニコン」というロシア人の記録だと勘違いしたりしていました。

サラリーマン時代、「この本は『ひつたい』の本だ」と盛んに言っていた上司がいました。「ひつたい」って何だろうとよくよく考えてみると、「必携」のことでした。この方は偉い人だったので、誰もその誤りを指摘できないまま、ずうっとそう言い続けていました。「マツターマン」を「ワンツーマン」とも言っていました。気持ちは分かりますが……。

こういふ人もいます。「教室」という単語がパソコンで漢字変換できないとどうのを見てみると、「きょうひつ」と入力していたのです。これでは出っかかりませんよね。「いつ来てもいい」を「ふるわって」ね」という人もいました。「賑わっている」を間違えて覚えたのでしよう。帰国子女の学生バイトに取引先の宛名を書いてもらおうと「〇〇会社 御中」と書くように指示したら、「〇〇会社 WANT YOU」と書いていたという笑えない話もあります。

唄の解釈違いも多いですよ。西田佐知子が昔唄った「コーヒールンバ」という曲がありますが、中に「コーヒーもかまたり〜♪」という歌詞があります。「なぜコーヒーも鎌足(かまたり)なんだろう。藤原鎌足の頃にコーヒーがあったのだろうか」と長い間疑問でした。皆さん分かりますか？「コーヒーもかまたり〜♪」って、「コーヒーモカマタリ」というコーヒー豆の名前だったんです。こういふことって結構ありますよ。

O W L I N F O R M A T I O N

「出版人」松浦武四郎とドサンコ出版社の共演

《松浦武四郎 北海道命名150年》記念イベント
松浦武四郎とドサンコ出版社
2月3日(土)～15日(木) 10:00～19:00(最終日は18:00まで)
紀伊國屋書店札幌本店 2Fギャラリースペース
※講演会トークセッションはいずれも1Fインナーガーデンにて14:00～15:30(予定)
(札幌市中央区北5条西5丁目7 sapporo55ビル TEL011-231-2131)
入場無料

幕末に蝦夷地を奥深くまで旅した三重県出身の探検家・松浦武四郎。「北海道の名付け親」として知られる武四郎はまた、その探査の克明な記録を編集・出版した膨大な著作物を遺しました。生誕200年でもある2018年、北海道を拠点とする「ドサンコ出版社」が集い、出版人・松浦武四郎の足跡とともに、地域に根ざした各社の書籍を展示します。

イベント期間中、2月4日には北海道ノンフィクション集団代表の合田一道氏を講師に迎えた講演会、10日には地域政策プランナーの小磯修二氏をモデレーターに、北海道の出版を牽引する3氏のトークセッションを開催。武四郎の出版人としての側面を照らし、地方出版の未来を発信します。



ほっこり絵本の原画・イラスト展

絵本「きょうのおやつは」出版記念
あべみち子 おやつほっこり展
3月3日(土)～8日(木) 10:00～19:00(最終日は18:00まで)
紀伊國屋書店札幌本店 2Fギャラリースペース
(札幌市中央区北5条西5丁目7 sapporo55ビル TEL011-231-2131)
入場無料

小樽在住のイラストレーター・あべみち子さんの手による絵本「きょうのおやつは」の発表を記念して、紀伊國屋書店札幌本店で原画展が開催されます。会場には絵本に使われた全ての原画のほか、このイベントのために描き下ろされたおやつのイラストが展示される予定。甘い匂いがいまでも届きそうな柔らかなタッチのイラストは、訪れたみなさんをほっこりと包み込みます。主人公「もこちゃん」と一緒にわくわくしながら、おやつを目で味わえる本作のように、子どもたちの五感を育てるおはなしを紡ぎ出す、絵本作家・あべみち子の世界をお楽しみください。

あべみち子さんの作品はホームページ(<https://www.abe-mi.com>)でもご覧になることができます。



中西出版/A4変形判34頁
2018年3月3日発売予定

野次、拍手、喝采… 壇上の青春

われ壇上に獅子吼する
青年弁論の世界から
齊藤俊彦・著
定価:本体1,500円+税(電子書籍版は1,000円+税)

青年団活動が隆盛を迎えていた戦後、各地で青年弁論大会が盛んに行われ、若者たちは弁論に青春をかけ、若い力と心の叫びをその7分間に昇華させました。

本書では著者が生まれ育った北海道江別市を中心に、往時の青年団活動の様子と、弁論にひたむきに取り組んだ青年たちのその後の半生を取材。また3章では多様化が進む今日の青少年弁論の現状と、現代の若き弁士たちの姿を紹介しています。



中西出版
四六判、366頁
2017年10月刊行
※電子書籍の価格は希望小売価格

医療用語から神話を紐解く

現代医療とギリシャ神話
岡本五十雄・著
定価:本体1,800円+税

ギリシャ神話を語源にもつ医学・医療用語の中から「身体の部位」「心理学用語」「病名や症状」など約40語を取り上げ、由来となった神話上のエピソードを紐解きながら解説。北海道医療新聞の新春・夏季特集号で好評を得た連載の書籍化です。

また岡本氏はエッセイ「北の文学三巨星 三浦綾子・渡辺淳一・河野文一郎先生との出会い」を同時発売。北海道文学史に輝く3氏との対話から生まれた一冊です。



中西出版
B6判、134頁
2017年12月刊行

色鮮やかな郷土記念誌

だての世紀
だての世紀制作委員会・編
定価:本体1,000円+税

2019年に誕生150周年を迎える北海道伊達市から、新たなスタイルの郷土記念誌が発刊されました。

1870年に仙台亘理の当主伊達邦成率いる集団移住により開かれた同市。その150周年を目前に、郷土の歴史や文化、現在の伊達の生活・経済を支える人々100人以上を丹念に取材し制作。地域の魅力を網羅した内容に加え、地元的女性をモデルに起用した華やかな紙面で雑誌のように楽しめます。



だての世紀制作委員会
(発売元:中西出版)
変形判273×210mm、280頁
2017年12月刊行



今年「北海道命名150年」とも「明治150年」の節目の年とも言われる。松浦武四郎の案を元に蝦夷地が「北海道」と決まったのは明治2(1869)年だから、疑問を持つ人がいるかも知れない。これは、「150」を前者は「年目」として、後者は「周年」として扱っていることに起因する。武四郎を「キーパーソン」と位置づける道の主導で、昨年からの関連する催しが実施、予定されている。我々道内の出版社もこの機会を捉え、紀伊國屋書店札幌本店様の主催で、道内出版社の活動をアピールする記念イベントをこの2月に開催する。また2018年は武四郎の生誕200周年にも当たり、出身地三重県松阪市では生没月である2月に記念式典が行われるそうだ。(Y)

●発行・編集／中西出版(株)
〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1-34
電話011-785-0737 FAX011-781-7516
E-mail: owl@nakanishi-shuppan.co.jp
●発行責任者／林下英二
●発行日／2018年2月5日



<http://nakanishi-shuppan.co.jp>